東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十卷第五號

昭和十五年五月

論叢

維新前後の開化思想……經濟學博士 本庄榮治郎

限界生產力說と勢力の問題……文學博士 高田保馬

時論

非常時局下に於ける日支の態勢……經濟學博士 石川興二

研究

販路說の過剩投資說への發展……經濟學士 青山秀夫

理想型の理論……經濟學士 出口勇藏

アウグスチヌスの共同體思想……經濟學士 澤崎堅造

說苑

蒙疆の人口と農業……經濟學士 菊田太郎

國民經濟的概念と經營經濟的概念……經濟學士 尾上忠雄

支那に於ける理想鄉思想……經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

第五十卷　五六四　第五號　二六

時論

非常時局下に於ける日支の態勢

石川興二

一

國民なるものは、その自然と人間と文化との一體的存在である。故に一國民を眞に知らんが爲めにはその國民をその自然と人間と文化との一體に於て體驗すると云ふことがその根柢となるのである。例へば日本畫の理解と云ふことについても日本國民についてこの根柢的體驗を有するものと然らざるものとにとつては自ら異ならざるを得ないのである。一國民の文化的表現と同樣にその云爲言動もこの根柢的體驗の基礎よりはじめて眞に理解し得るのである。こゝに人文科學の研究者にとつて、海外旅行の特に必要な意義があると考へられる。

私の海外旅行は、何時でも戰爭との關係に置かれて居た。その第一回は歐洲留學であつて大正十一年の春日本を立つて上海、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、ポートサイドを經て西歐に到着した。この西歐への道程に於て此等亞細亞の諸要地が悉く白人ことに英人の支配の下にあることを知つた時、世界社會問題の解決と云ふことがはじめて强く私の關心となることゝなつた。西歐に於ては英國、獨逸、佛蘭に滯在し、その間歐州文化

史に於て現れた諸國をギリシヤよりスペインに至るまで巡歷した。歐洲戰爭直後のことであつた故に私の滯在した西歐諸國は英國に至るまで尙ほ戰爭の打擊を現らはして居た。ことに獨逸はマークが日々慘落して行つた時代であつて、國民は生活の必須品すら十分得られない狀態にあつた。ベルダン要塞を訪れ、悉くの地面が砲彈によつて耕され盡された樣を見、破壞されたる村落が白い小さな十字架によつて眞白に蓋はれ、嘗ての村の名の冠せられた墓場を處々に見ては感慨無量なものがあつた。歸途米國を訪れ日本に歸つたのは滿三年後の春であつたがその間つとめて有色人種に接し、それ等の人々より亞細亞解放についての意見を聽くことにつとめた。かくして歐米を一應巡歷し亞細亞問題に興味を有するに至つた自分は、東洋旅行を熱望した、昭和九年滿洲事變後程なく大連より北支に入り天津、北京、八達嶺に至りはじめて北支を見、滿洲國に入つて撫順、奉天、新京、ハルビンに至り歸途朝鮮に入り平壤、京城、慶州も訪ねた。かくして支那の一端に觸れた自分は支那の中部に觸れることを希望して居た。ことに日支事變は日本の運命を決すべき重大問題であつて、日本の經濟問題も社會問題もこれとの關聯をはなれては考察し得ないところのものであるが故に、これが考察の基礎として支那ことにその中部を體驗することを願ふたのである。幸にしてその機を得日支事變下の支那を訪れることゝなり、三月四日上海に到着し、その間蘇州、杭州をも訪れ十四日の後南京に向ひこゝに五泊して徐州に至り二泊後袞州に至り翌日、曲阜の孔子廟に參り、濟南に一泊し青島に夜行し一泊の後四月廿八日乘船して歸途についたのである。

こゝに私は此度の旅行の體驗を基礎として現代の日支問題について考察して見ようと思ふのである。

二

嘗て北支の一部と滿洲を見た私は此度は支那の國民史の中心部をなす地帶に入つたのであるが、その大部分は同樣に行けども行けどもはてしない廣大な野であり從つてまた泰山のあたりの雄偉な山の姿を除けば殆んど總てが極めて單調なものであつた。それは日本の自然が小さな島國であつて至るところ變化の多い山川の美に富んで居るのとは全く對照的なものであつた。支那でやかましく云はれる西湖の美と云ふが如きものでも、日本の山川の美になれた目にとつてはその水と云ひ山と云ひ平盤的なものであつて極めてあつけないものである。只だそれが山も水もない單調な支那の自然の中にあることを考へる時、その重んぜられることが初めて會得し得られるのである。要するに廣大單調な大陸であると云ふことゝ狹小で變化に富む島國であると云ふことが、支那と日本の自然の根本的な對照をなして居るのであるが、この自然に見られる特徴は兩國の人生を根本的に深く規定して居ることを體驗した。先づその人間について勞働者に至るまで支那人はのびのびと迫らざる態度で生きて居るが、これとの對照に於て日本人のこせこせした島國根性は特に強く氣付かせられる。この日本人の偏狹な島國根性は支那にある日本人の黨派的對立の姿となつて現れて居る。このことは上海に上陸早々我々を面喰らはせた。即ち日本側の考へを知る爲めには、分裂對立してゐる諸勢力に一々接してこれを知らなければならないのである。然しこの現地の分裂狀態は實は日本自體の分裂の姿を現地の鏡に寫し出し我々に明確に見せてくれたに過ぎないことを知つた。我國史上に於ける對陸政策の失敗も任那の問題に於てまた朝鮮征伐に於て內輪の黨派的分裂より起つて居ることを思ふ時、今日の對支難局にあたり最も戒心すべきは、この日本人の島國根性であることを痛感したのである。この島國根性黨派根性を克服し日本國民が統一的なものとして支那に對處するのでなければ到底こ

の複雜な對支問題を解決し得ないことを何よりも深く反省しなければならない。

然し支那の自然は亞細亞大陸の一部であるに對し、日本の自然はこの亞細亞大陸つゞきではなく島國として一應これより切斷せられ而もこれに接近して居たと云ふことは日本歷史に積極的意義を與へるものともなるのである。卽ちかくして日本は世界文化の源泉をなしたこの文化大陸より絕へず文化を攝取して不斷の文化的成長を果け來つたのであるが而も島國であつたが故に支那に於けるが如く陸續きの外敵より絕へず侵されることなく自分自身としての一貫せる發展をすることが出來たのである。從つて支那に於ては王朝が武力的征服的關係に於て絕へず交替したに對し日本は「天皇を中心とする國民共同體」としての國體を變ずることなく一貫せる發展を果け得たのである。故に支那には國民がそれによるべき確乎たる中心がなく僅に「天」と云ふが如き理念を立てこれに據つたのであるが、日本の國民にとつては萬世一系の天皇に於て直觀的な中心が存するのである。故に國民の總てがこの日本の國體の姿に還り、自我を捨てゝその中心である天皇に歸一することが出來たのである。この時國民全體は不壞の一體となつてその難關を突破し得たのである。かくて日本が島國であつたと云ふことは、日本國民の島國根性黨派的分裂性の因をなして居るが、またこれを克服すべき基礎となる尊きものを與へる一因ともなつたと云ふことが出來るのである。

以上見られた兩國の自然の特色はこの自然の上に展開した兩國の歷史を根本的に規定して居るが、今やこの日支の歷史は相共に倒れるか又は相共に生きるかの運命に立ち至つたのである。此度の旅行によつてこの支那の自然の上に展開した歷史について古き支那と新しき支那との對照を明に體驗せしめられ、このことは今日日支の運

命を考へるにとつて重要なことである。故に先づこの體驗より述べよう。

三

支那の歴史に於て最も豊かなこの地方を族して深く感じたことは、歴史的な遺物が極めて少なく、また僅に殘つて居るものも荒廢して居ると云ふことである。このことは古い都であつた蘇州、杭州を訪ねまた南京に行つて同樣に感じたところである。南京に於ける明の故宮には橋の壞れが見られるのみである。僅に殘る明の孝陵すら荒れて居る。まして明以上のものなど殆んど見られない有樣である。このことは奈良のあたり京都のあたりに古い歴史を物語る數々の記念物を豊かに保有して居る日本より見る時奇異な感にうたれまた寂寥を覺えざるを得ないものである。北京に見られた巨大な建築物も殆んど明清のものであつた。このことはまた兩國の國體の相異を物語つて居るのである。即ち支那は易姓革命の國であつて武力によつて王朝が絶へず交迭したが故にその度毎に前朝の經營が破壞されざるを得なかつたのである。然るに日本に於ては「天皇を中心とする國民共同體」が一貫したが故にこれと共に古きものが保持された。そしてそれは外形に於てのみならず精神的にも生きて保もたれて居るのである。即ち一つは斷續の歴史であり他は一貫せる發展の歴史である。

この支那の歴史の荒寥たる中にあつて、ひとり曲阜の孔子廟のみは奇蹟的な存在である。即ち兵火の災を被ることもなく、今日まで一貫して保存せられたのみならず益々立派になつたのであつてそれは北京に於て見られる宮殿建築につぐ偉大な規模のものである。從つて孔子直系の子孫は連綿として七十七代に及び廟の側に一萬數千坪の府邸に王公の生活を續けて居る。この曲阜の壁城の上に立てば孔子林が見られる。それは孔家代々の墓地で

あつて、その面積は曲阜全體の面積とあまり變りないものである。この支那の歴史の中に於ける殆んど只一の連綿たる存在を見て日本人は先づ我皇室を思ひ浮べるのであるが、而も、その意義は全く異なるものである。孔家のこの連綿たる存在はむしろ王朝の交迭に基礎付けられたものである。即ち前王朝を否定して新に立つた王朝は自己の易姓革命を基礎つげまた人民の信望を得る爲めに支那の固有の文化としての儒教の祖である孔子を厚く祀り土地を獻じたのである。故にこのことは異民族の王朝に於て特に著しく見られる。即ち清朝の皇帝は頻りにこゝに參り碑を獻じた。今日の立派な本殿は清の雍正帝によつて建てられたものである。即ち覇道による交替が王道によつて自分を基礎づけんとしたのである。更に代々の專制君主はこの人民に服從を求める爲めにもこの儒教思想を利用したのである。かくて孔子廟を見るものは武力なるものが強きが如くにして短く弱いものであることを而して文化なるものが弱きが如くにして長く強いものであることを如實に教へられるのである。

この清朝に至るまでの支那の歴史は、要するに王朝が幾度交代してもそれは北方より現れた專制君主が儒教なる北方思想を以て支配する歴史であつた孟子も曲阜に近い鄒縣の人であつて要するに儒教思想は北方思想であつた。この單調な繰り返へしの歴史は遂に南方思想による南方よりの支配によつて破られることゝなつた。こゝに新しき支那の歴史がはじまるのであるが、それは孫文より發するのである。即ち孫文は洪秀全による太平天國運動が失敗に終つた後二年の一八六六年洪秀全と同じ廣東の香山縣に生れた。支那に於て最も早く西歐文化に接しまたその人情も北方人とは異なり潑溂として居る南方こそ北方よりの專制主義打破の發源地となる運命にあつたと云ひ得る。かくて生々しい太平天國運動の影響の中に生ひ立つた孫文は既に彼の生涯を決定すべき素地を與へ

られて居たのである。幾度か失敗しながらその經驗を以て更にその革命思想を具體化し以て革命の實踐を繰り返へしかくて國民黨を作り且つ新支那の指導原理を確立するに至つたのである。北方イデオロギーが專制主義への盲從に利用せられるに對しこの南方イデオロギーは個々人を活動體として把握しその能力を民族の爲めに發揮せしめんとするものであつた。こゝに專制的支那より近代的支那への指導原理の變遷が見られる。今日南京に於て見られる最も莊大な中山陵は、正に曲阜の孔子廟と相對すべきものであつて、こゝに新舊支那の指導原理の對立が象徴されて居ると考へることが出來るであろう。この對立は蔣介石が過去への盲從に利用された曲阜の孔家並に孔子廟に壓迫を加へたと云ふことによつて更に實踐的に現はされて居る。

この孫文による創業を大成し遂に支那全國を國民黨によつて統一するに至つたものは蔣介石であつた。南京の軍官學校の中にある彼が最後まで住んで居た家を訪ねて彼の用ゐて居た寢室、居間等を見たのであるがそれは支那の顯官の住居と比較にもならない極めて質素なものである。彼はこの武官學校の校長として學生と起居を共にし親しくその薫陶に當つたのである。この南京の軍官學校の出身者と同じく彼が校長として親しくその薫陶にあたつた浦黄軍官學校の出身者とが國民軍の中堅を構成し以て蔣介石の武力の基礎をなして居ると云ふことは全く偶然でないのである。今日蔣介石の不動の勢力の根柢をなすものへは、この武力的基礎と宋美齡との結婚による浙江財閥との血緣關係により作られた彼の經濟的基礎と陳兄弟のCC團がナチスの全體主義を學んで確立した蔣介石の獨裁制にあると云はれて居る。

この蔣介石は一介の武辯ではなかつた。南京の紫金山にある堅牢な立派な天文臺は蔣介石によつて營まれたも

のである。また國立中央研究所には支那全體に亙る鑛物、植物、動物化石等の標本より殷墟の發掘物等の考古學的なものに至るまで豐富に集收されて居るが、これ等は外國の學者の助けを得て統一的に整理研究されつゝあつたものである。また全國經濟委員會は支那國民經濟の參謀本部として國際聯盟等よりも援助を受け活動して居たのであるが、その支那國民經濟建設の基礎的研究は水利だけに關するものだけでも膨大な出版物となつて居るのであつて、これ等の資料草稿等が、今日南京の接收圖書整理委員會に保存されて居る。また濟南の千佛山の寺院の壁面には彼の新生活運動の標語が書かれたまゝになつて居るのを見た。此等のものに接し我々は蔣介石の遠大な識見と努力に對して敬意を表せざるを得ないのである。

蔣介石はかくの如く、軍事、政治、經濟、教育等の一切に亙つて、國民支那の建設に努力し著々その效を收めつゝあつた。然し彼はこの爲めに「抗日」を有力な手段として利用したのである。支那の抗日運動は、日本よりの所謂廿一ケ條の要求に發するのであるが、國民黨はこれを國民的統一に利用した。かくして抗日教育も續けられたのである。この抗日による日本勢力の排除の他面に於ては自ら歐米依存を强化することゝなつた。支那がこの道を押し進めて行くことを何時までも傍觀して居るならば日本は遂にその存立をすら危くするに至るのである。かくして遂に滿洲事變は起つたのであるが、これと共に蔣介石は愈々抗日運動を强化し、西安事變によつて更に容共抗日となつた。この勢は遂に盧溝橋事變となり日本の不擴大方針にも拘らず遂に日支事變にまで擴大したのである。

然るにこの日支事變によつて日本がそれと戰はなければならなかつた相手は、最早や舊き支那ではなく蔣介石

によつて覺醒され訓練された新しき支那であつた。かくしてはじめ三四ヶ月に終るべくも考へられたこの事變は今や三年にも及ばんとし戰線は北支・中支・南支へと全面的に擴大することゝなつたのである。而してその發揮した戰鬪力は舊き支那には思ひもよらないものである。從つて日本軍の損傷も少なくなかつた。その激戰の跡は上海の市街戰に於て特に目立つて居る。市の至るところ破壞の跡が見られたが、ことに閘北一體に於て甚だしい。上海より北上し行く時、通過した殆んど總ての驛の建物も破壞されて居り、當時の戰の樣を忍んだのであつた。南京陷落後、愈々長期抗戰を決心した蔣介石は、「國民黨臨時全國代表大會」の『宣言』に於て、次の如くに述べて居る。

「この抗戰の目的は日本帝國主義の侵略を防衛して國家民族の滅亡を救ひ。同時にこの抗戰を通じて愈々その工作を加緊して建國の任務を全ふせんとするものである」即ち、この戰爭の目的は日本帝國主義侵略の防衛にありとし、これと同時に抗戰即建國を主張してゐるのであるが、「日本帝國主義の侵略の最大目的は、軍事的努力を藉りて經濟的掠奪をなすに過ぎぬ」とし、また曰く「我等は全力を竭して國家民族のためにその生存と獨立を爭取し三民主義に依據して、政治經濟上の建設を斷じて繼續し中國をして世界にその自由と平等とを獲得せしむべきである」即ち三民主義による新支那の建設は、戰爭の爲めに延期せらるべきではなく抗戰と共に益々催進さるべきであるとするのである。蔣介石は、この抗戰即建國の立場より一切に向ふて最善の努力をなしつゝある。かくて支那の政權の所在地は奥地に移動したとは云へ、その支配は日本軍の占領地域以外は全體に亙つて依然行はれて居るのである。

この蔣介石側の抗戰力の基礎は、先づその指導原理の統一と確立にある。新支那建設の一切はその根本原理より諸方策實踐の順序に至るまで孫文によつて明確に規定され、國民黨政府はこれを基礎としその實現に一貫して努力してゐるのであつて、この戰爭の意義も抗戰卽建國もこの原理の上に基礎付けられて居り國民に對して明確な自覺が與へられて居る。その軍事上並に政治上の組織に於ては、蔣介石が最高の軍權、政權を統一的に掌握し一切を統制して一貫せる政策を遂行しつゝある。これを教育上より見るも、教育の力を非常に重んずる蔣介石は大學教授、大學生をも率いて去つたのであつて、今日大學教育に至るまで依然として繼續して居るのである。これを經濟上より見れば、日本軍によつて殆んど總ての海港と重要な工業地盤とを失ふたが、而し抗戰卽建國を實行し、一方經濟遊擊隊の組織によつて農產物の日本軍占領地域への流入を阻止するに努めると共に最善を盡して經濟建設に努力してゐるのであつて、奥地の經濟的開發に努め、合作社運動によつて農業上の生產力の增進につとめ、工業については出來るだけ機械工業の奥地移動に努める外、手工業の組織化に努めてゐる。農村單位のマニュアクチュアー組織によつて軍需品の生產をも行ひ、日本軍の進擊に應じてその移動を可能ならしめて居るとのことである。かく自己の力を最善に利用する外、更に出來るだけ全世界經濟の援助を得ることにつとめ、現に英・米・露等よりこれを得つゝあるのである。

蔣介石が孫文の遺志を繼承し、その三民主義に基いて膨大なる支那に、はじめて國民的統一を與へ、政治・經濟・教育の國民的組織を通じて支那の國力を增大した功績は何人もこれを否定することが出來ない。而も彼は、今やその限界に立ち至つたのである。卽ち、彼は今や國力を擧げて、抗日戰爭を徹底的に繼續せんとしつゝある

のであるが、このことは彼が支那建設の根本原理として居たところの孫文の三民主義と矛盾するのである。即ち三民主義は「民族」「民權」「民生」であるが、民族の獨立が成つて民權が成り、かくてはじめて民生がなると考へられたのである。[1] 故に「民族」は三民主義實現の基礎であり、前提である。然るにこの民族の獨立の爲めには、日本と提携して亞細亞を解放しなければならないことを、孫文は深く自覺し、强調したのである。これ即ち、孫文の大亞細亞主義である。即ち、孫文は彼の死の前年、大正十三年神戸に於て講演せる『大亞細亞主義』に於て次の如くに述べて居る。

「歐羅巴の各民族が發揚し、各民族が强盛となるや、彼等の勢力は漸次東亞に侵入し來り、吾等亞細亞各民族と各國家を滅亡させようとして壓迫を加へ來り、この三十年前には最早、吾等の亞細亞全部に完全な獨立國は一つも無くなつたと言ふてもよいやうになつてしまつた。」「その復興の起點となつたのは何處であつたかと云へば、即ち日本であつて、日本は三十年前に締結した外國との不平等條約を廢止してしまつたのである。日本が不平等條約を廢止したその日は、即ち吾等全亞細亞民族復興の日であつた。」「日本が露國に勝つた日から、亞細亞全部の民族は歐羅巴を打破しようと思ひ、獨立運動が發生するやうになつた。……要するに、日本の戰勝の結果、即ち亞細亞民族獨立の大希望が生じて來た。」「この進步的思想が極度に發達したならば、亞細亞全部の民族は始めて提携し得るやうになり、亞細亞全部の民族的獨立運動が始めて成功し得るやうになるのである。」即ちこの大亞細亞主義による亞細亞民族の提携によつて支那民族の獨立も眞に成功し得るのであるが三民主義の實現はこの民族の獨立を前提として居るが故に、結局大亞細亞主義は三民主義の前提をなして居る。而もこの大亞細亞主

1) 『孫文建國大綱』參照

義の實現の爲めに、孫文は日支の提携を特に重んじて居るのである。卽ち「東部亞細亞の最大民族は中國と日本であり、中國と日本は、この運動の原動力である」と述べて居る。然るに蔣介石はこれと全く反對に、「抗日」を以てモツトーとなし、この爲めに歐米依存を行ひ、容共抗日によりソ聯依存にまで進んだのである。而して今やこれ等白人諸國の力をかりて、日本に對する長期抗戰を繼續し、消耗戰を以て日本を苦しめ、以て日本の國力を萎靡せしめんとしつゝあるのである。支那がこの道をあくまで遂行し得たとすれば、こゝに孫文の大亞細亞主義とは全く反對の方向が實現することゝなる。卽ちこれまで支那を白人の侵略より防衛し、亞細亞再興の動力因となつた日本の國力を衰へしめ、これと共に支那自らの國力をも消磨し、反對に白人諸國の勢力を强化し、かくして支那民族の獨立を不可能ならしむるのみならず、白人への隷屬を永久に亞細亞全體の運命たらしめることゝなるのである。これが白人の亞細亞侵略の本來の望みだつたのであつて、こゝに白人の世界制覇の大望は愈々成就することゝなる。

四

この蔣介石の限界を自覺して立ち上つたものが、汪精衞とこれをまとふ若き人々であつた。この旅行のはじめ、私は汪一派の人々を蔑視する言說を少なからず耳にしたのであるが、それ等の人々の多くが自己の利害の立場より新政權の成立を好まざるものであり、また汪派の人々に直接接したこともない人であることをやがて知つた。これと反對に、親しく汪氏とこれをまとふ人々に接觸して居る人々に會ふことにより、これ等の人々が一樣に汪派の人々の人格識見に深く敬服して居ることを知つたのである。考へて見ればこの汪派の人々程その一身上

の利害より云へば、不利な且危險な地位にあるものはないのである。事實、汪氏は河内の隱家に在つて、藍衣社員に襲はれ、危く難を免れたが、彼と共にあつた同志曾仲鳴は死去した。この時、汪氏は第三次の聲明を發し、依然、蔣介石に對し日本と和平交渉に入るべきことを强調した。その終に於て、「余はこの文章を發表した後は如何なる時に、曾仲鳴先生に續いて兇手に殪れるかも知れぬが、それは余の望むところである。余の死後、國民諸君は克く之ら余の遺した文字を熟讀玩味して、余の主張を明確に會得して貰ひたい。」と叫んで居る。また、汪氏は重慶にありし時の彼の地位と生活について述べたる後、「斯くの如く余は生きて安樂な生活を送り、死しては、歷史に譽れを遺すことが出來たのであつた。斯る好都合な地位にあつた余が、重慶を去つたのは何故であるか、余は三十年前、積極的革命家として立つて以來余一身の事、個人の幸福を念頭に置いた事は決してない。之は萬人周知の事だ。今や余は齡五十を越え、又余の愛する國は滅亡の浮沈に遭つてゐる。斯る秋に個人の人氣等を事新しく考慮する理由は決してない。[1]」と述べて居る。これ等の言は彼の人格をよく表らはしてゐるのである。

この汪氏は、日支關係に就ての彼の根本的な考へを次の如くに述べて居る。「日本は東亞に於ける一大强國にして、經濟に軍事に文化に着々進歩を遂げ、最近數十年の狀況は、日本無くんば卽ち東亞なしと謂ふも過言にあらず。而して中國は事毎に立遲れては居るが、東亞に於ける國土大にして人口多く、極めて長き歷史を有する國である。若し中國が强盛を見るに至らば、日本は必ず中國の强盛に赴くことが、日本に對し如何なる影響を與ふべきや、日本に有利なりや有害なりやに付注意を拂ふであらう。若し日本に取り果して有利ならば、日本は當然

1) 汪精衛『抗戰の眞相』

中國の强盛に赴くを希望し中國を友とするを願ふであらう。若し又日本に有害ならば、日本は必ず中國の强盛ならむとする動機を打碎き、中國を敵と認むるであらう。……故に中國革命をして成功せしめんと欲すれば、必ず日本をして中國革命の成功が日本に有利なることを知らしめなければならぬ。之れは權謀術策ではなくして誠意である。」と述べ、孫文の「中國革命の成功は日本の諒解に俟たねばならぬ」なる語を引用して「此言葉の意義は重大である。」と云ふて居る。[1] これが彼の日支關係に關する一貫せる根本的立場であつて、彼の今回の行動のみならず、これまでの行動もこの立場より十分に理解せられ得るのである。彼は濟南事件に對してさへも、この立場より次の如くに述べて居る。「濟南事件起りて日支關係惡化の兆を示すに至つた。固より仇は解くべし結ぶべからず。中國は此の時、極力忍耐し極力意志の疏通を謀り、日支關係を惡化より好轉に復歸せしむべきであつた。不幸當時の國民政府は計此處に出でず、遂に日支の關係をして惡化の一路を辿らしめ、延て九・一八事變の發生を見るに至らしめたのである。」[2] 當時、彼は一亡命者として海外にあつたのであるが、歸國して行政院長となり外交部長を兼ね自ら上海停戰協定、塘沽停戰協定を結すんた。當時の心境につき、「余の當時の考は依然仇は解くべく結ぶべからずの信念に基き、局部的一時的安定を計つて進んで全國的永久の和平を計らんとするにあつた」[3] と述べて居る。また梅津・何應欽協定を締結せしめたのも彼であつたが、この爲め彼は兇手のピストルに射たれるに至つたのである。

この彼は日支事變が起つて日支相擊つに至つたことを眞に悲しんだ。「余は日支兩國相鬪つは卽ち兩者共に傷き、兩國和平すれば卽ち共存する事明々白々である事を斷定して疑はない。兩國が和平の爲めに共に努力すれば

1) 2) 3) 汪精衞『吾人の日支關係に對する根本觀念と前進目標』

必ずや東亞百年の安定を得るであらうが、然らずんば兩者共に傷つき均しく滅亡するであらう。この點に就いては兩國人とも總て懷疑的であり乍ら而も、一面確信的なものをもつてゐる。二十六ケ月の苦戰の結果は日本の消耗尠しとせず、中國の犧牲も亦輕しとしない。兩者ともに傷つき共に破滅への一路を辿つてゐるが同時に共存共榮、共同發展の途も又只一路である事は明々白々である。兩國有志の一時禍福褒貶を恐れて右顧左眄し、敢てその態度を決することないのはどうした事であるか。」[1]と述べて居る。而して彼自らは禍福褒貶をすて、その所信へ向つて突き進んだのである。即ち彼は、言論の自由なき重慶を脱出したる後、近衛聲明に答へて和平をなすべきことを重慶政府に懇切に反覆建議したのである。曰く「余の和平の建議は日本の近衛內閣の聲明に贊同したのである。何故に贊同せりやと言はゞ余は依然從來一貫せる信念の下に、日本に對しては仇は解くべく、仇は結ぶべからずとの考を有して居るからである。一年半戰つた結果、日本の國力と中國の民族意識とは何れも充分に之を示すことが出來た。日本が既に中國に對して侵略的野心なきことを聲明して手を差伸べ、共同目的の下に親密なる合作を計らんことを求めたるに對し、中國は何故に手を差伸べないのであるか、恰も兄弟二人一度組打ちをした後、悔いて泣き、改めて仲直りすると言ふことは何と痛ましいことであり、又喜ばしいことであらう。」[2]と云ふて居る。又曰く「所謂三原則(善隣友好、共同防共、經濟提携)に基き、各種の具體條件を商議し、相互に共利益を受くる樣計つたならば、東亞永遠の平和の基礎は茲に確立し、今後共同の生存と共同の發展は順を逐ふて實現出來るであらう。」[1]

汪精衛が第一次聲明を發し、平和建議をしたのは昭和十三年十二月二十九日であつたが、同志曾仲鳴の死後、

1) 『第三次聲明』
2) 『吾人の日支關係に對する根本觀念と前進目標』

十四年三月廿八日には、第三次聲明に於て依然平和建設をなして居るのであるが、遂にその効なきを知つて十四年七月十日遂に、蔣と斷つことを決心して曰く「余は今日吾々の眼前に二つの道が開かれて居ることを認める。一つは蔣に追隨して繼續抗戰を高調する道である。……他の一の道は蔣と關係を斷絶し、總理孫先生の遺志を更めて闡明し、更めて實行し、日本に對して仇は解くべし、結ぶべからずとの根本意義に基き、敵を轉じて友となすことに努力し、第一歩は日支の和平を恢復し、第二歩は東亞の和平を確立するにある。此二つの道の中、前者の道は國を亡ぼし、種族を滅する道であり、後者は中國を復興せしめ、東亞を復興せしむる道である。余は中國を復興し、東亞を復興せしむる道に向つて進まんと決心して居る。余は同志と團結し、且つ全國の各黨各派及び無黨無派の有志の士と團結し、共に此道を進まんとして居るものである。」と聲明した。かくて、八月二十八日より三日間、上海に國民黨第六次全國代表大會を開き、孫文の大亞細亞主義の精神に基いて宣言提案を討議決定しこれを發表した。九月のはじめには歐洲大戰がはじまるに至つたが、その九月十日、彼は重慶の同志に通電し、その中に曰く「吾東亞が經濟侵略主義の害毒を受くること茲に百年、最近に至つては共產主義の流毒殊に甚しく且速かなり、中日兩國は此の世界動亂の秋に當り、宜しく堅く相結合して、東亞をして此渦渦の中に陷れしめざると共に、經濟侵略主義及共產主義をして其跡を東亞の天地より根絶せしむべし。斯くすれば必ず勞少くして功多し。且中日兩國が若し此の際戰爭を終結せしめ、平和の道を開かば日本は固より其の特殊の地位を利用して經濟上の繁榮を圖り得べく、中國は之に依り國民をして休養生息せしめ、工商業の發達を圖り、以て戰後の疲弊を恢復し、三民主義中華民國の建設を完成し得べし。其上に一歩を進めて和平の素志に基き、東亞永遠の和平を確

1) 2) 『吾人の日支關係に對する根本觀念と前進目標』

立し、引いて世界の和平を確保することは、眞に中日兩國國民の最大なる責任なりと言ふべし。要するに中日兩國は宜しく共同目標の下に共同して努力す可く、斯くして和平は始めて實現し得べし」と述べて居る。即ち經濟提携により、日支兩國は相携へて資本主義國の帝國主義的侵略を防止し、また共同防共により共同して共産主義の侵略を防衛すべきことを高調して居るのである。かくして共同の目的を實踐することにより、相携へて日支の發展を眞に計ることが即ち眞の善隣友交なのである。

我々が南京に入つたのは、汪精衛を主席とする新國民政府が正に生れ出でんとして胎動に緊張し、警戒嚴なる際であつたが、この新政府は遂に三月三十日成立した。

五

かくして今や支那には二つの政權が樹立し、日本は支那に對し二重の關係に立つことゝなつた。即ち日本はこの汪氏の新政權に對しては相携へて東亞新秩序の建設に努力すると共に、他方蔣の重慶政府に對しては、それが屈せざる限り戰爭を繼續せんとするのである。然しこの兩政權は全く別個な無緣なものではなく云はゞ共通の地盤に立つて居る。即ち兩者共通の地盤は國民黨並に國民である。これを比喩的に云ふならば、一個の水タンクにある相對する二つの口である。その水が何れかに傾くならば、他の口は無用なものとなるのである。而もこの水が何れに傾くかを決定するところのものは、實に日本の誠意ある實踐の如何である。

抑も汪精銳が近衛聲明に應へて和平を建議したのは、日本の誠意を信じたるが故である。これに反し蔣介石がこの建議に應じなかつたのは、日本の誠意を疑ふたが故である。汪氏は第三次の聲明の中に、蔣介石が「吾人は

日本に對しては信を措くことが出來ない。日本は條約を平氣で違約し、又その言說も當にはし難い。」と云ふたことを述べて居る。これに對し汪氏は日本の誠意を信ずるものであるが、更に進んで曰く「世には中日合作の前途に對し、誠意の有無を懸念する者あること屢々耳にする所なるが、誠意は兩方面の努力に依り現はれ、且兩者不斷の努力に依り增進せらるゝものにして、決して觀望して之を得らるゝものに非ざることを知らざるべからず」[1]と述べて居る。こゝに彼の深き決心が表らはれてゐる。

かくして汪氏は近衞聲明に應へ日本の誠意を期待して全責任を以て立ち上つたのであるが萬一日本がこの汪氏の信賴を裏切るが如きことあれば、蔣介石の主張が正しいことゝなるが故に、汪氏は全くその面目を失しその立場を失ふことゝなる。かくて支那國民は愈々蔣介石を信じこれと强く結ばつて長期抗戰を繼續することゝなり、日支の運命は、も早や取り返しのつかない方向に進まざるを得ないことゝなる。これと反對に日本が、蔣介石の云ふが如き帝國主義的侵略者でないことを實踐を以て示めし、誠意を以て新政權を助けその建設に助力すると共に更に直接國民大衆に對してその生を厚くする爲めの諸種の文化工作に力を用ふるならば、茲に蔣介石の抗戰はその理由を失ふことゝなり、從つて民意は次第に汪氏に傾き蔣介石の勢力は遂に失墜せざるを得ないのである。かくてはじめて日本は、眞に支那全體と相提携して東亞新秩序の建設に向ひ得るに至るのである。

かくの如く日本は今や重大なる岐路に立つて居るが、この後の道のみが日本を眞に生かす道である。四月廿六南京に於ける還都慶祝典禮に列せし阿部大使の祝辭に答へて汪氏は「事變以來日本は東亞新秩序の建設を提唱して居るが、所謂東亞新秩序には二つの重大意義がある。第一は東亞百年の經濟侵略と廿年の共產主義の惡影響を

1) 汪精衞の全國通電(昭和十四年九月一日)

根本的に掃除するにある。第二は中日兩國が善隣友好、相互提携の原則に基き相共に東亞秩序建設の責任を協力分擔するにある。これによつてみれば、東亞新秩序の建設の意義と孫總理の大亞細亞主義は完全に一致するものである。現在我々が兩國の國交を整理するため協力して東亞建設を分擔するの責任は、歴史の事實と固有の意義に基くものであつて、我々は最大の努力をもつてその實現を期さねばならぬ」と述べて居るが、眞に兩國を結ぶべきところの根柢は兩國の本質的な事實に於て置かれて居るのである。卽ち我國體は「天皇を中心とせる國民共同體」であつてこの　天皇の天職は天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめんとし給ふことである。この中外に施して悖らざる眞理を東亞に押し擴げたところのものが日滿支をして各々その處を得しめかくすることにより其各の國內に於て總ての人々をしてその處を得しむるところの東亞新秩序である。[1] 民生を厚くすることを究極目的とする三民主義並に大亞細亞主義の實現せんとするところのものもこれを離れては無いのである。かくて日本がその國體の本義に基いて支那に對し、支那が孫文の根本精神に立つて日本に對するならば、こゝに自ら東亞新秩序建設がなされ得るに至るのである。かくして眞に日支を生かし亞細亞を生かし世界を生し得るのである。故に日本はその國體に基いて行動することの外に眞に自己を生かす道べきはないのである。日支事變が日本をしてこの深き自覺に到達せしめ、この世界史的創造の道に上らしむる時、日支事變に於て死せる十萬の英靈も最大の意味に於て生かさることゝなるのである。これに反し日本の行動が資本主義の利己主義精神に支配されるならば、自己の經濟的利益に眼を蔽はれこの大局に對する洞察を失ひ日支再び相ひ戰はざるを得ざるに至るのである。このことは現地に於ても最も强く體驗された點である。卽ち事變の過程に於て不當に有利な事情に置かれ

1) 我國體と近衞聲明との關係に就ては、拙稿『戰爭の意義と共同體的國內革新の急務』（本誌第四十七卷第六號）參照

たものは、これを保持することを何よりも重んじ、これを失ふことを以て戰爭を無意義ならしむるものとなし、それ故にまた新政權の樹立に極力反對し、かくて日支が再び戰爭するに至るも止むないとするのである。彼等は國民の生命の犧牲をも伴ふ戰爭を、經濟的利益の打算に於て考へるのである。この資本家階級の利己心が戰爭を支配する時、これが卽ち帝國主義戰爭である。現に日本の國內に於ては資本主義的秩序が强く支配してゐるが故に、この危險は極めて大である。要するに日本が支那に對し、その國體の本義に基いて對處するか、又は資本主義的に規定されて對處するかと云ふことが、現代日本の運命を決定することとなるのである。

然らば日本が、その國體の本義に基いて對處すると云ふことは如何にして可能であらうか。これが爲めには先づ現代日本が資本主義的に歪曲せられ從つて國內に於て利己主義的に分裂立對し現地に於てもこれが反映して居ることを率直に自覺しなければならないのである。

これを國民經濟上について見れば、國民大衆にとつて生活の必須品が次第に窮乏しつゝあるにも拘らず他方、資本家階級の不正による暴利潤の追求は尙ほ廣く行はれて居る。これ等のことは長れ多くも　陛下の御宸襟を惱まし奉るまでに立ら至つたのである。而もこれに對する適切な方策對策は何等講ぜられて居ないのである。この經濟上の不安が支那に對し、また諸外國に對して、日本の國力を弱めつゝある惡影響は甚大なるものがあるのである。今や日本の資本主義的經濟は、國民の生活必要消費並に生產力の生產を第一として再編成されなければならない。また現地の經濟工作を見るも自己に急であつて支那民衆の經濟生活の窮乏を思ふ暇がない有樣である。

これを政事について見るも、支那に於ては蔣介石の政權は一貫して居るに拘らず、日本に於ては事變以來既に

四度目の內閣交迭があり、その間政策の一貫せる發展を見ることは出來なかつた。また各々の內閣について見るも確たる根本方針がないが故にその政策は資本主義的に歪められた。またかく變更が頻繁である以上統一力の缺茹することは云ふまでもない。これを教育上より見るも、我國に於ては今日の變革期に處すべき根本思想が未だ十分に確立して居らず、むしろ市民主義的個人主義的な教育が依然行はれて居る。かくて現代の變革期に處すべき指導國民を教育するに足らないのである。このことは結局、國民生活の各領域に於ける指導層をして利己主義者ならしめることゝなり、從つて各領域が自己の利益を主として黨派的に分裂對立することゝなり、眞の國民的統一が失はれてゐる有樣である。このことの現代變革期に於ける意義は極めて重大である。これを支那に於ける占領地區について見るも、校舍は教育以外の用に當てられて居り、大學教育は行はれず中等學校教育も停頓狀態にある。然るにこれに對し白人の教育事業は日本の占領地區に於ても今日依然繼續されて居る。汽車の止まる程の大きさのところには、必ず教會の高い尖塔が見られる。徐州に於ては丁度日曜日の朝、教會を訪れたのであつたが、その大きな堂には支那の靑年少年までが滿場となつて居た。またこの教會の隣には外人の手によつて小學校、中學校の教育が何等の障害なく行はれて居るのを見た。このことが支那の國民に對する意義の容易ならざることを思ふたのである。武力は直に効果を呈するが而も短かいのである。武力に代つて互久的な眞の秩序を生み出すものは文化である。而も文化が効果を發揮するには時間を要するのであるが故に、今よりこれに努力しなければならない。防共と云ふことも武力によつて眞にその目的を達し得ることではなく結局、國民大衆に對して經濟生活、醫療、教育等の文化工作を進めなければ不可能である。かくしてはじめて眞に永續する治安が確立され

得るのである。而もこれ等文化工作につき今日日本が支那に於て行へるところは極めて不十分である。

かくて現代日本を眞に生かす爲めには先づこの資本主義的に歪められたる國情を「天皇中心の國民共同體」としての國體の本義に基いて革新しなければならない。即ちこの國民共同體に於ては、天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめんとし給ふ　天皇の天職を、その能力次第に分擔し奉りこれを實踐することが國民總ての職分である。この點に於て軍人も學者も經濟する者も總て少しも變りないのである。このことによつて國民總ては天皇と一體となり以て君民一體、萬民扶翼の實を擧げ得るのである。かくして日本國民が國體の本義に徹する時、國内の資本主義的歪曲は革新されざるを得ない。[1] この革新されたる日本が對外的にもまた正しく行動し得給ことゝなるのである。即ち　天皇がその天職とし給ふところの天下億兆一人もその處を得ざるものなからしめ給ふと云ふことは、中外に施して悖らざる人類的な眞理であるが故に、この　天皇の天職を分擔し奉りこれを實踐すると云ふ日本國民の職分は、この眞理を同時に世界に布くことでなければならない。こゝに我國體の世界史的意義とこれに基く現代日本國民の世界史的な使命が存するのである。かくて日本國民がその國體の本來の姿を自覺しこれに還へる時にのみ、はじめて東亞新秩序建設の動力因として強く正しく立ち上り、遠大の計畫を以て持久的に進み得るに至るのである。

1)　稿拙『現代日本の革新』(本誌第四十九卷第三號)參照